

青少年の清涼飲料摂取に関する
実態について

○秦満、内藤真理子、木村光孝

九歯大・小児歯

【目的】

戦後、清涼飲料とくに炭酸飲料の消費が伸び、さらに近年は、健康志向から果実飲料や乳飲料やコーヒー・紅茶・緑茶などの茶葉系飲料やスポーツ飲料・機能性飲料など種々の清涼飲料が飲まれるようになってきている。

今回、主として青少年が主体的に摂取できる自動販売機の清涼飲料の摂取の実態について調査研究を行った。

【方法】

福岡県内の中学校生徒 75 名、高等学校普通科生徒 39 名、高等学校体育科生徒 35 名、短期大学食物栄養科学生 148 名、歯科大学学生 75 名に対し、1995 年 9 月下旬の 1 週間に自動販売機から購入した清涼飲料に関する調査を行った。調査は、各自に質問表を配布し、自筆による回答を得た。

また自動販売機で市販されている清涼飲料の一部について、糖質、リンおよびカルシウム含量の測定を行った。

【結果】

調査対象中、体育科の高校生に最も清涼飲料摂取が多く認められ、半数近くの生徒が 1 日に 2-3 本以上を摂取していた。その他の生徒・学生については、1 週間に 1-5 本の摂取が多く認められた。

清涼飲料に含まれる添加物を考慮すると、適度の茶葉系飲料や乳性飲料摂取は容認し得るものであるが、いずれも多量の摂取は好ましくないことが示唆された。

当医院における定期検診の状況について

○毛防子徳香、水上由紀子、岩男 好恵、松田久美子、柏木伸一郎

小児歯科柏木医院・福岡市

当院は開業して 18 年経過し、長期に渡って来院する患児が増えている。このため現在の診療形態は、定期検診が主流となっている。定期検診は、ほとんどが 4 ヶ月間隔であるが、咬合・歯肉炎・ハイリスク管理などの場合は、必要に応じ 1~2 ヶ月間隔としている。

最初の来院目的としては、う蝕の治療や予防・歯並び咬み合わせ・検診等であり、定期検診を希望している割合は、それ程高くはない。そこで、処置終了時に定期検診の必要性について十分説明し、来院を促している。最終的に、定期検診の希望の有無を確認し、希望者はコンピューターに登録し、管理している。また、定期検診の定着を図るため、リコールノートを作成したり、ハガキや電話で連絡するなどいろいろ努力している。しかし、患児の年齢が高くなるに従い、中断者が増えるのも事実である。そこで今回、定期検診の長期継続を目指す目的で、現在の状況を調査した。

定期検診を希望している患児で、1995 年 1 月から 12 月までの 1 年間に来院した 2772 名を調査対象とした。この内、終了・転居・転医などの明らかな理由で来院の可能性がない患児が、135 名 4.9%であった。これ以外の 2637 名を、継続群と中断群の 2 群に分類し、年齢・継続期間・来院間隔および来院地区などについて、比較検討したので報告する。